

宮田修

（令和三年四月号）

後悔がたくさんあるが今日もまた心に一つ後悔増える

謝っておきたい人の大半は別れたままで行方分からず

死ぬまでに作品一つ残したいもう感覚も衰えたのに

わが夢の帰る場所なし故郷の海はとつくに埋め立てられて

父母もなく町並みも変わり果て僕を迎える故郷はなし

幸運に地球で生まれ年老いて幻を見て幻聴を聞く

もう僕は賞味期限が過ぎている今日も一日会う人はなし



●作者の言葉

思ってもいない「年間選者

賞」、ほんとうにありがとう

ございます。奈良県御所市

で、先輩の皆さんと細々と歌

会を続けています。そして、

短歌を楽しんでいます。「心

の花」には何のお役にも立て

ず、お荷物になっていないか

心配しています。

二十年以上も前、入会を許されたばかりの全国大会の時です。「何を詠むか」がテーマで幸綱先生のお話がありました。今、もうすぐ終わる生身の自己存在を詠もうと思いました。後しばらくよろしくお願いします。

●選者の言葉

人生五〇年は信長の時代、実際の平均寿命はもつと短かっただろう。今や八十代は当りまえ。九十代もどんどん増えていよう。しかし、齢を重ねれば重ねるほど羞恥心は拭えず、後悔も増えていくのが人生の必定。

〈僕を迎える故郷はなし〉は平凡な表現のように見えるが、見方によってはとても現代社会への警告となっている。

故郷の海や山へ帰郷することは、かつて死者の魂を呼び戻すための霊的な行動であったはずなのに、今日では観光や安息のための行為となってしまっている。

浸食もさることながら、地域開発もその一因であるが、あらためて故郷とは何かを突きつけてくれた一連である。